

8

その他無脊椎動物

8 その他無脊椎動物

「その他無脊椎動物」の掲載種については「広島県の絶滅のおそれのある野生生物（第3版）（2012年出版）」と比較して28種から43種へと増加した。内訳は絶滅危惧Ⅰ類4種、絶滅危惧Ⅱ類4種、準絶滅危惧21種、絶滅のおそれのある地域個体群1種、情報不足13種である。この増加のおもな要因は、調査が進展したことに加えて、環形動物を専門とする担当者を新たに加えたことで分析精度が増したことによる。さらに前版と比較して、各種の生息地がより詳細に明らかになった点も特徴である。

生息域別に見た場合、水圏動物は34種が含まれており、細分すると海産（汽水産も含む）30種、陸水産4種という内訳である。絶滅危惧Ⅰ類のカブトガニ（鋏角類）の生息状況は前版作成のための調査時から改善されておらず、依然として生残が厳しい状況である。カブトガニの成体にのみ外部寄生するカブトガニウズムシ（扁形動物）が今回の調査時に竹原市から確認され、宿主同様に絶滅危惧Ⅰ類とした。宿主特異性の高い共生（寄生）生物は宿主とともに絶滅することを我々に暗示する。ウチワゴカイ、ビクニイワムシ（環形動物）は、かつては尾道市の干潟に生息した大型ゴカイ類であるが、生息環境の悪化や捕獲圧などによって著しく減少しているため絶滅危惧Ⅰ類とした。干潟環境の悪化から、そこに生息するミナミアエラコ、ユムシ、サビネミドリユムシ（環形動物）、ハスノハカシパン（棘皮動物）を絶滅危惧Ⅱ類に、アカムシ、サナダユムシ、セトウチドクチュムシ、ゴゴシマユムシ、スジホシムシ（環形動物）、ハクセンシオマネキ、スナガニ、ハマガニ、ハシボソテッポウエビ、マングローブテッポウエビ（十脚類）、シャミセンガイの1種（腕足動物）、ヨツアナカシパン、スカシカシパン、ウチワイカリナマコ（棘皮動物）、ヒガシナメクジウオ（ナメクジウオ）（脊索動物）を準絶滅危惧とした。今回、干潟に生息するツバサゴカイ、スジホシムシ（環形動物）、ハサミシャコエビ、ベンケイガニ、ウチノミカニダマシ、ヒメヤマトオサガニ（十脚類）は情報不足としたが、人為的な改変などの攪乱によって生息環境の減少や劣化が懸念されており、生息状況の把握が必要である。また、潮下帯に生息するオノミチキサンゴ（刺胞動物）も生息環境の悪化から準絶滅危惧とした。概して、干潟の環境悪化は改善されておらず、そこに棲む動物の絶滅の危険性は増大しているという結論を下さざるを得ない。陸水産の4種は、甲殻類2種とヒル類（環形動物）2種である。ミナミヌマエビは絶滅のおそれのある地域個体群、トゲカイエビ、タゴビル、チャイロビルは情報不足とした。陸水域についても生息環境の悪化が懸念されており、生息状況を把握することが急務である。ミナミヌマエビは、同属の近縁種・亜種が国外から移入され、本種との競合や交雑による遺伝的攪乱が懸念されている。さらに、地域ごとに遺伝的に分化している可能性が高いため、在来個体群の保全を目的に絶滅のおそれのある地域個体群に選定した。また、タゴビルは両生類に寄生するため、宿主の生息域縮小にともなって生息地の減少が懸念されている。

陸産動物は9種含まれており、その内訳は、クモ類（鋏角類）4種、ザトウムシ類（鋏角類）4種に加えて、ヒル類1種である。このうち、準絶滅危惧のヒトハリザトウムシと情報不足のイソタナグモは海岸性で、島嶼部には比較的多くみられるが、本土側ではかつての埋め立てや開発にともなって生息環境が減少している。また、イソタナグモは近縁な外来種が知られており、競合などの影響が懸念されている。準絶滅危惧種に指定されているキシノウエトタテグモ、コガネグモ、ゴホントゲザトウムシは生息環境の人為的改変や乾燥化などが指摘されている。アカオニグモは標高の高い地域の半自然草原に生息し、管理放棄によって生息適地が減少していると考えられる。情報不足としたスギモトブラシザトウムシとダイセンニセタテズメザトウムシは、生息地のササ原や林床の人為的改変、乾燥化による影響があり、生息地の存続状況について調査が必要である。今回、コマイクガビルが情報不足として新たに追

加されたが、森林伐採などの生息地攪乱が原因で生存が脅かされている。

(大塚 攻)

その他無脊椎動物選定種

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

- 1 カブトガニ
- 2 カブトガニウズムシ
- 3 ウチワゴカイ
- 4 ビクニイワムシ

12 オオヨコナガピンノ

13 ウチノミカニダマシ

地域個体群 (LP)

- 1 ミナミヌマエビ

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 1 ミナミエラコ
- 2 サビネミドリユムシ
- 3 ユムシ
- 4 ハスノハカシパン

準絶滅危惧 (NT)

- 1 オノミチキサング
- 2 アカムシ
- 3 スジホシムシ
- 4 サナダユムシ
- 5 セトウチドククチュムシ
- 6 ゴゴシマユムシ
- 7 ヒトハリザトウムシ
- 8 ゴホントゲザトウムシ
- 9 キシノウエトタテグモ
- 10 アカオニグモ
- 11 コガネグモ
- 12 ハクセンシオマネキ
- 13 スナガニ
- 14 ハマガニ
- 15 ハシボソテッポウエビ
- 16 マングローブテッポウエビ
- 17 シャミセンガイの1種
- 18 ヨツアナカシパン
- 19 スカシカシパン
- 20 ウチワイカリナマコ
- 21 ヒガシナメクジウオ(ナメクジウオ)

情報不足 (DD)

- 1 ツバサゴカイ
- 2 コマイクガビル
- 3 タゴビル
- 4 チャイロビル
- 5 スギモトブラシザトウムシ
- 6 ダイセンニセタテヅメザトウムシ
- 7 イソタナグモ
- 8 トゲカイエビ
- 9 ハサミシャコエビ
- 10 ベンケイガニ
- 11 ヒメヤマトオサガニ

カブトガニ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①

Tachypleus tridentatus (Leach, 1819)

節口綱劍尾(カブトガニ)目 カブトガニ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	大型種で、成体の全長は、通常、雌は約 60 cm、雄は 50 cm に達する。日本では夏季の大潮満潮時に雌雄つがいと潮間帯上部に産卵を行い、冬季は潮下帯で越冬する。「生きた化石」と知られ、中生代に生息していた祖先種とほとんど形態的に異なる。本種は遺存固有型の分布を示し、日本は本種の分布の東限に位置する。体は前体部、後体部、尾剣からなる。雄では、前体部の前縁に凹みがあり、第 1, 2 歩脚が交尾の際の把握器に変形する。また、後体部の縁棘は雌は 3 対、雄は 6 対であるが、これらの性的二型は成体のみに現れる。
生息・生育状況	広島県内で成体による産卵や幼体の生息が確実に観察できるのは、近年は江田島市と竹原市のみである。これらの産地でも、繁殖期に確認できるつがいも数つがい程度であり、絶滅の危険性がきわめて高い。
存在を脅かす要因・保全の留意点	一生を通じて生活の場である藻場、干潟が開発によって減少している。水質の汚濁、とくに重金属、化学物質が発生異常を引き起こすことが報告され、今後、マイクロプラスチック汚染による被害も想定される。幼生と幼体の生息地である干潟では潮干狩りによる攪乱もある。また、ペットブームでカブトガニの幼体がネット上で販売されており、捕獲される危険性もある。
特記事項	瀬戸内海の個体群は遺伝的多様性が低く、均一であり、日本や世界の全生息地の中でも特異的な個体群と考えられる。
産地情報	広島市(安芸区)、竹原市、江田島市(江田島、能美、大柿)

Nishida S. & Koike H. 2009. Genetic structure of Japanese populations of *Tachypleus tridentatus* by mtDNA AT-rich region sequence analysis. *Biology and Conservation of Horseshoe Crabs* (Tanacredi J. T., Botton M. L. & Smith D. R., eds.), p. 183-196. Springer, Boston, MA.

大塚 攻・西原直久・平山良太・田中隼人・近藤裕介・斉藤英俊・清水則雄・富川 光・飯田 健・米谷まり 2017. 広島県の主要産地(江田島市、竹原市)における絶滅危惧種カブトガニの生息状況. *日本ベントス学会誌*, 72 (1): 16-26.

(西原直久・大塚 攻・平山良太)

カブトガニウズムシ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-①

Ectoplana limuli (Ijima & Kaburaki, 1916)

渦虫綱三岐腸目 ヨガタウミウズムシ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	カブトガニの成体の前体部の腹側や歩脚、後体部腹側の生殖口蓋、鰓脚などに付着している。カブトガニの幼体ではこの共生関係は確認されていないので、宿主特異性がきわめて高いといえる。伸長した個体の体長は約 8 mm、体幅は約 1 mm まで。産卵は宿主の鰓書上で行い、仔虫で孵化する直達発成型。日本では、佐賀県、福岡県、岡山県産のカブトガニに共生していることが報告され、福岡県、岡山県では宿主とともに絶滅危惧 I 類に選定されている。東南アジアに生息するマルオカブトガニ、ミナミカブトガニには同属別種のウズムシ類が共生している。
生息・生育状況	カブトガニの成体のみに外部共生するという高い宿主特異性を示し、さらに共生率が必ずしも 100% ではないため、宿主以上に絶滅が危惧される。なお、佐賀県では共生率は 100% というデータもある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	宿主のカブトガニとほぼ同じ要因である。カブトガニ成体のみに寄生することから宿主成体さらには幼体の生息環境を保全する必要がある。
特記事項	生活史を通じて宿主であるカブトガニの成体に依存しており、種、成長段階についても宿主特異性があり、きわめて絶滅の危険性が高いと判断される。宿主とともに生息状況に注意していかねばならない。
産地情報	竹原市

逸見泰久・川勝正治 2012. カブトガニウズムシ. *干潟の絶滅危惧動物図鑑* (日本ベントス学会、編), p. 233. 東海大学出版会, 秦野.

近藤裕介・平野勝士・櫻本賢一郎・飯田 健・米谷まり・藤 太稀・大塚 攻 2018. 広島県産カブトガニに関する生物学的記録: 成体の表在生物 2 種および野鳥に捕食されたと考えられる幼体死骸. *広島大学大学院生物圏科学研究科瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター報告*, 16: 1-5.

(大塚 攻)

ウチワゴカイ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②, CR+EN-⑤

Nectoneanthes uchiwa Sato, 2013

多毛綱サシバゴカイ目 ゴカイ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 25 cm に達する大型のゴカイ類であり、体中・後部の疣足枝上部にウチワ状の葉状体をもつ。本種の学名は、長らく同属の普通種オウギゴカイ <i>N. oxypoda</i> (Marenzeller, 1879) と混同されていたが、それとは別種であることがわかり、2013 年に新種記載された。瀬戸内海、有明海、八代海、朝鮮半島南部および中国大陸の内湾の潮間帯下部の砂泥質底に埋在する。かつて尾道市の漁業者の間で「ウンバ」と呼ばれ、延縄や一本釣り用の釣り餌として漁獲されていた。
生息・生育状況	1930 年代の広島県内の本種の生息地として、尾道市の山波ノ洲をはじめとする松永湾内の砂泥地が挙げられている。とくに二枚貝ホトトギスガイが発生する所に多いとされる。国内では内湾の砂泥質干潟の埋立・干拓のため、生息地は著しく減少していると考えられており、近年の採集記録は九州沿岸に限られている。かつての釣り餌採集地における本種個体群は、危機的な状態にあることが懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	内湾の砂泥質干潟の埋立や干拓のため、生息地は著しく減少していると考えられている。
特記事項	1980 年代以降、遊漁の釣り餌として「コガネムシ」や「アカコガネ」の商品名で中国南部や山東省から輸入されている。
産地情報	なし

佐藤正典 2012. ウチワゴカイ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会 編), p. 222. 東海大学出版会, 秦野.

森 喬以・田村松太郎・牧野謙二 1932. 広島県産主要餌虫類に関する報告書. 45 pp. 広島県水産試験場.

(斉藤英俊)

ビクニイワムシ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-⑤

Marphysa tamurai Okuda, 1934

多毛綱イソメ目 イソメ科

環境省: DD

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	釣り餌として利用されるイワムシと近縁なイソメ類で体長 50 cm に達し、生時は赤褐色を呈する。本種のイワムシとの識別点として、前口葉は半円状で、背中線に沿うような深い縦溝がないことが挙げられる。伊勢湾、瀬戸内海および九州南部から生息が報告されており、尾道では潮間帯上部から下部の有機物の多い砂底、愛知県知多半島西岸ではアマモの生えた砂泥底に埋在する。かつて尾道市の漁業者の間で「ビクニ」と呼ばれ、一本釣りや延縄用の釣り餌として漁獲されていた。
生息・生育状況	1930 年代の本種の生息地として、広島県内では尾道市 (尾道, 細ノ洲) が挙げられている。近年の本種の採集記録は九州沿岸に限られ、1990 年代の熊本県天草市や鹿児島県始良市および 2010 年代の鹿児島県奄美市からの報告例が知られる程度である。かつての釣り餌採集地における本種個体群は、危機的な状態にあることが懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種個体群の減少要因は不明であるが、生息が記録された当時の底質環境は有機物多い砂底とされることから、好適な生息環境が減少した可能性がある。
特記事項	本種は、尾道産個体をタイプ標本として新種記載された。
産地情報	なし

森 喬以・田村松太郎・牧野謙二 1932. 広島県産主要餌虫類に関する報告書. 45 pp. 広島県水産試験場, 広島.

斉藤英俊 2016. 遊漁に利用される環形動物の現状. 号外海洋, 57: 83-92.

(斉藤英俊)

ミナミエラコ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) NT-b (種々の状況を加味してランクを上げた)

Pseudopotamilla myriops (Marenzeller, 1884)

多毛綱ケヤリムシ目 ケヤリムシ科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	干潟に生息する大型の多毛類で、長さは 30 cm にも達する。干潟、潮下帯の砂泥に強靱な皮状棲管を作って生息している。鰓糸には約 20 個ほどの眼点を有する。胸部の発達した襟は左右に分離し、剛毛を有する節は 8 節。日本では本州（東京湾以西）、四国、九州に分布する。日本をタイプ産地として記載された <i>Pseudopotamilla myriops</i> (von Marenzeller, 1884) (= <i>Potamilla myriops</i> von Marenzeller, 1884) はシンガポールをタイプ産地とする <i>P. oligophthalmos</i> (Grube, 1878) (= <i>Sabella (Potamilla) oligophthalmos</i> Grube, 1878) のシノニムとされるが、形態学的・分子系統学的検証が必要であり、ここではシノニムの考えを踏襲しない。
生息・生育状況	大型種であり、その棲管も堆積物の深部に及ぶため、安定した厚い堆積物層のある干潟を必要とする。
存在を脅かす要因・保全の留意点	成体は安定した厚い堆積物の堆積した干潟が生存上必要である。さらに、ほかのケヤリムシ科と同様に浮遊幼生をもつと考えられ、周辺海域も汚染のない水域であることが必要と考えられる。
特記事項	近年では、山口県秋穂湾・大分県守江湾・熊本県菊池川・神奈川県小網代干潟などから記録されている。熊本県では準絶滅危惧種に選定している。
産地情報	呉市（呉，安浦），竹原市，三原市（三原），尾道市（因島，瀬戸田，向島），東広島市（安芸津），江田島市（大柿）

山西良平 2012. ミナミエラコ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ペントス学会, 編), p. 228. 東海大学出版会, 秦野.

岸 由二・小倉雅實・江良弘光・柳瀬博一 2013. 小網代干潟における無脊椎動物の多様性・RD 種に関する予報. 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 54: 71-84.

(大塚 攻・斉藤英俊)

サビネミドリユムシ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) NT-a, NT-b (種々の状況を加味してランクを上げた)

Anelassorhynchus sabinus (Lanchester, 1905)

ユムシ綱キタユムシ目 キタユムシ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 5 cm に達し、吻は短い。体色は灰白色であり、縦走筋が均一のため、生時はゴゴシマユムシのように縦に走る白線が見えない。インド洋および西太平洋に広く分布すると報告されており、日本では瀬戸内海の潮間帯中部から潮下帯の砂泥底に埋在する。体壁が薄く内蔵の色を写し出すため、かつて尾道市や廿日市市の漁業者の間で消化管内容物の色によって「クロユ」と「シロユ」に区別し、延縄用の釣り餌として漁獲していた。
生息・生育状況	1930 年代の広島県内の本種の生息地として、尾道市（尾道）と廿日市市（地御前，大野）が挙げられている。岡山県では 1989 年以降、瀬戸内市・玉野市・笠岡市の干潟で採集事例があるものの、広島県では近年確認されておらず、個体群の衰退が懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	他のユムシ類と同様に干潟の減少や劣化および海域の基礎生産力の低下が影響している可能性がある。保全のためには潮間帯だけでなく潮下帯における生息状況の現状把握が求められる。
特記事項	2000 年以降国内で唯一本種の生息が確認されている岡山県では、絶滅危惧Ⅰ類に選定されている。
産地情報	なし

西川輝昭 2012. サビネミドリユムシ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ペントス学会, 編), p. 236. 東海大学出版会, 秦野.

森 喬以・田村松太郎・牧野謙二 1932. 広島県産主要餌虫類に関する報告書. 45 pp. 広島県水産試験場, 広島.

(斉藤英俊)

ユムシ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①, VU-②

Urechis unicinctus (Drasche, 1880)

ユムシ綱ユムシ目 ユムシ科

環境省: NT

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	体長 30 cm に達する。体色は基本的に赤みを帯びた乳白色で、体表には乳頭状突起がある。吻が短小で体幹との間にくびれがなく、肛門の周囲を尾剛毛が一重に輪になって囲む。北海道から九州、オホーツク海、日本海、黄海の潮間帯から潮間帯の砂泥底に、初夏には深さ 1 m 以上になる U 字形の巣穴を掘って生息する。この巣穴にはカニ類、カイアシ類、貝類などが共生している。
生息・生育状況	1930 年代の広島県内の本種の生息地として、福山市（手城）、尾道市（山波、尾道、吉和、向島西）、呉市（小用、大屋）、広島市（本浦、大河、江波、草津、井ノ口、五日市）、廿日市市（地御前、大野、厳島）、大竹市（大竹）、江田島市（柿ノ浦）が挙げられている。2000 年以降では江田島市、尾道市の干潟で採集事例があるものの、近年ではとくに潮間帯個体群の衰退が著しい。
存在を脅かす要因・保全の留意点	漁業者や釣り人による捕獲圧、干潟の減少・劣化、および海域の基礎生産力の低下が影響している可能性がある。保全のためには潮間帯だけでなく潮下帯における生息状況の現状把握が求められる。また、浮遊幼生を持つために周辺海域も汚染がないことが保全上求められる。
特記事項	広島県内の釣り具店では本種はユムシ、コウジおよびスーパーコウジなどの商品名で販売されている。ユムシとコウジは、現在も瀬戸内海で採取されているが、両者の体色や皮膚の厚さの違いは生息環境の違いによるものであり、潮下帯の砂礫底から潜水漁で捕獲される個体（コウジ）は、皮膚が厚く橙色をしており、潮間帯の砂泥底から捕獲される個体（ユムシ）は、皮膚が薄く灰色をしている。スーパーコウジは、1996 年頃より中国の山東省付近で採取されたものが輸入されている。
産地情報	尾道市（尾道）、江田島市（沖美、大柿）

森 喬以・田村松太郎・牧野謙二 1932. 広島県水産試験場 (1932) 広島県産主要餌虫類に関する報告書. 45 pp. 広島県水産試験場.

斉藤英俊・丹羽信彰・河合幸一郎・今林博道 2011. 西日本における釣り餌として利用される水生動物の現状. 広島大学総合博物館研究報告, 3: 45-57.

(斉藤英俊・大塚 攻)

ハスノハカシパン 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-①

Scaphechinus mirabilis (Agassiz, 1863)

ウニ綱タコノマクラ目 ヨウミヤクカンパン科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	北海道から九州まで広く分布する。殻は直径 5 cm 程度で周縁は薄く、輪郭は円に近い五角形（変異が大きい）。棘は短く、暗紫色。口器は下面中央に位置し、肛門は体の後方に開く。砂質底の浅海に生息する。
生息・生育状況	スカシカシパンと同所的な出現が確認されている。以前は多数個体が見られた江田島市の浅海では、近年個体数の減少が著しい。個体数の減少の原因は不明である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	開発などによる生息地である自然海岸の縮小や消失。
特記事項	個体数の減少要因の解明が急がれる。幼生がプランクトン生活を送るため、広範囲にわたる沿岸環境の保全が重要である。
産地情報	福山市（内海）、廿日市市（大野）、江田島市（沖美、大柿）

西村三郎, 編著 1995. 原色検索日本海岸動物図鑑 II. 663 pp. 保育社, 大阪.

(富川 光)

オノミチキサゴ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

Dendrophyllia cribrosa Milne Edwards & Haime, 1860

花虫綱イシサンゴ目 キサンゴ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	備後灘によく見られたことから尾道市にちなんで命名される。礫・岩礁性の潮通しのよい汚染の少ない海域で、低潮線以下（上浅海帯から亜浅海帯）に生息する。樹枝状の群体を形成し、時として 50 cm を超える大きさになる「非造礁性」のサンゴ。枝の径は 1 cm 程度。筈の径は 4~7 mm で、枝では 4~5 列に配列する。共肉は橙赤色。
生息・生育状況	備後灘には比較的多産していたが、海洋開発行為（海砂採取や埋め立て、護岸工事による海流の変化）などによる生息環境の悪化により減少した。その後、以前のような開発行為が制限され、生息環境の悪化は軽減されたが、減少した個体群の回復には時間がかかるため、実態の把握は難しい。
存在を脅かす要因・保全の留意点	海洋開発行為などによる生息地の消失・減少。水質汚濁に弱い。
特記事項	近年、気候の急激な変化により、異常気象が多発し、日本でもサンゴの白化・死滅が報告されている。その多くは造礁サンゴであるが、本種への影響も注視する必要がある。
産地情報	呉市（音戸、下蒲刈、蒲刈、豊）、福山市、廿日市市（宮島）、江田島市（沖美、大柿）

稲葉明彦 1988. 増補改訂瀬戸内海の生物相 II. 475 pp. 広島大学理学部付属向島臨海実験所.

久家光雄 2002. 大柿町町制 45 周年記念誌「大柿町の花の生き物」, 216 pp. 大柿町.

(西原直久)

アカムシ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b, NT-c

Halla okudai Imajima, 1967

多毛綱イソメ目 セグロイソメ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	大型のイソメ類で体長 90 cm に達し、生時は赤橙色を呈する。前口葉に短い 3 本の感触手が後ろ向きに生え、疣足の背触鬚が伸長する。本州中部、瀬戸内海および有明海の潮間帯下部から潮下帯の砂礫底に存在する。本種は日本固有種と認識されたこともあったが、近年オーストラリアやマレーシアからの生息が報告されている。体表から粘液を分泌し、アサリやムラサキイガイなど二枚貝を包み込んで捕食する。かつて尾道市の漁業者の間で「アカムシ」や「モドキ」と呼ばれ、一本釣りや延縄用の釣り餌として漁獲されていた。本種は、近年においても「タイムシ」と呼ばれて遊漁の釣り餌として利用されている。
生息・生育状況	1930 年代の広島県内の本種の生息地として、尾道市（山波、尾道、向島西、細島）および呉市（豊島）が挙げられている。1990 年代の広島湾の調査では廿日市市（大野）、広島市（似島）、江田島市（切串、三高、高田、深江）および呉市（宇和木）のアサリ、ムラサキイガイおよびマガキが存在する干潟で確認されている。2000 年代以降では福山市（横島）、尾道市（細ノ洲）および廿日市市（大野）における確認例がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	アカムシは二枚貝を捕食する大型種であり、餌生物の豊富な環境を必要とする。近年のアサリ生産量の減少の影響を受けていると考えられる。
特記事項	2004 年以降、遊漁の釣り餌として「タイムシ」の商品名で中国福建省から輸入されている。広島湾ではカキ筏から垂下されているプラスチック製パイプ中に生息し、「カキムシ」の商品名でカキ収穫時の副産物として販売されることがある。本種のタイプ産地に尾道が含まれる。
産地情報	広島市（南区）、呉市（倉橋）、尾道市（尾道）、福山市（内海）、廿日市市（大野）、江田島市（能美、沖美、大柿）

山西良平 2012. アカムシ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 224. 東海大学出版会, 秦野.

Saito H. & Imabayashi H. 1997. Ecological distribution of *Halla okudai* (Polychaeta: Lysaretidae) in the intertidal flats of Hiroshima Bay. J. Fac. Appl. Biol. Sci., Hiroshima Univ., 36: 11-21.

(斉藤英俊)

スジホシムシ 準絶滅危惧(NT) DD-a (種々の状況を加味して評価した)

Sipunculus nudus (Linnaeus, 1766)

スジホシムシ綱フクロホシムシ目 スジホシムシ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 20 cm に達する。体表が金属光沢を放ち、縦横に走る溝で格子状に区切られる。また、スジホシムシモドキとは異なり、刺激を受けると体がくびれて数珠状になることはない。暖水性の汎世界種と認識されており、日本では陸奥湾以南から沖縄の各地から生息が報告されている。潮間帯から水深 100 m までの浅海でとくに貝殻の破片が混じった砂泥底に埋在する。かつて広島県内各地の漁業者の間で「キゾウ」や「キドウ」と呼ばれ、延縄用の釣り餌として漁獲されていた。
生息・生育状況	1930 年代の広島県内の本種の生息地として、福山市 (鞆)、尾道市 (山波, 細ノ洲), 三原市 (須波), 竹原市 (二窓), 呉市 (三津口, 三ノ瀬, 阿賀), 坂町 (横浜), 広島市 (江波), 廿日市市 (地御前), 大竹市 (玖波) および江田島市 (切串, 柿ノ浦) などが挙げられている。2000 年以降では尾道市, 竹原市, 江田島市および廿日市市の干潟で確認されているものの, 個体群の衰退が懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	干潟の減少や劣化および海域の基礎生産力の低下が影響している可能性がある。保全のためには潮間帯だけでなく潮下帯における生息状況の現状把握が求められる。
特記事項	2010 年以降, 遊漁用釣り餌として BB ワームの商品名で中国南部や山東省から輸入されている。
産地情報	竹原市, 尾道市 (尾道), 廿日市市 (大野), 江田島市 (沖美, 大柿)

西川輝昭 2012. スジホシムシ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 234. 東海大学出版会, 秦野.

斉藤英俊・岩崎貞治・近藤裕介・大塚 攻 2014. ハチ干潟における釣り餌生物ホシムシ類の分布状況. 広島大学大学院生物圏科学研究科瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター報告, 12: 1-9.

(斉藤英俊)

サナダユムシ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Ikeda taenioides (Ikeda, 1904)

ユムシ綱キタユムシ目 サナダユムシ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	本州から九州まで記録があるが、現在でも確実に見られる地域は少ない。ユムシ綱の中でも大型の種で、体幹は 65 cm 以上、口吻は 2 m に達する。体幹部は濃い赤褐色、口吻には褐色から黒色の縞模様がある。浅海の泥中深くに生息し、巣穴から泥表面に口吻を伸ばし、デトリタスを口に運び食べていると考えられている。
生息・生育状況	県内からは尾道市・竹原市・呉市の潮間帯から記録されており、生息状況は安定しているようである。
存在を脅かす要因・保全の留意点	開発などによる生息地である浅瀬や干潟の縮小や消失。
特記事項	日本各地から記録されているが、どの地域でも希少種となっている。
産地情報	呉市, 竹原市, 尾道市 (向島), 東広島市 (安芸津), 江田島市 (大柿)

大城匡平・平林 勲・邊見由美・後藤龍太郎 2020. サナダユムシ (環形動物門: ユムシ綱: サナダユムシ科) の紀伊半島, 日本海及び奄美大島からの記録. 日本ベントス学会誌, 74: 93-97.

Goto R, Sakamoto S, Hayakawa J & Seike K. 2017. Underwater observations of the giant spoon worm *Ikeda taenioides* (Annelida: Echiura: Ikedidae) in a subtidal soft-bottom environment in northeastern Japan, which survived tsunamis of the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake. *Journal of Oceanography*, 73: 103-113.

(富川 光)

セトウチドクチュムシ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

Arhynchite hayaoi Tanaka & Nishikawa, 2013

ユムシ綱キタユムシ目 キタユムシ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 8 cm に達し、吻は短い。体色は乳白色であり、縦走筋が均一のため、生時ゴゴシマユムシのように縦に走る白線が見えない。日本固有種であると報告されており、瀬戸内海の潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に埋在する。かつて尾道市や廿日市市の漁業者の間で「コウジュ」と呼ばれ、延縄用の釣り餌として漁獲されていた。
生息・生育状況	1930年代の広島県内の本種の生息地として、尾道市（尾道、吉和、向島西、細島、細ノ洲）、廿日市市（大野、巖島）および江田島市（柿ノ浦）が挙げられている。近年では竹原市の干潟における確認されているものの、個体群の衰退が懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	干潟の減少や劣化および海域の基礎生産力の低下が影響している可能性がある。保全のためには潮間帯だけでなく潮下帯における生息状況の現状把握が求められる。
特記事項	本種はかつてオウストンミドリユムシと呼ばれていたが、分類学的な混乱があり、2013年に竹原市八チの干潟の個体をタイプ標本として新種記載された。
産地情報	竹原市、江田島市（大柿）

西川輝昭 2012. オウストンミドリユムシ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 237. 東海大学出版会, 秦野.

森 喬以・田村松太郎・牧野謙二 1932. 広島県産主要餌虫類に関する報告書. 45 pp. 広島県水産試験場, 広島.

(斉藤英俊)

ゴゴシマユムシ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

Ikedosoma gogoshimense (Ikeda, 1904)

ユムシ綱キタユムシ目 キタユムシ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	体長 6 cm に達し、吻は短い。体表には緑色の小斑点が密に分布し、生時、縦走筋が肥大して白線となって見える。日本固有種であると報告されており、相模湾、伊勢湾、瀬戸内海および天草の各地から生息が報告されている。潮間帯下部から潮下帯の砂礫中に深さ約 10 cm の L字型の巣穴を掘り、開口部の周囲に長さ約 0.8~1 cm のフットボール状の糞粒をばらまく。かつて広島県内各地の漁業者の間で「イヌユ」と呼ばれ、延縄用の釣り餌として漁獲されていた。
生息・生育状況	1930年代の広島県内の本種の生息地として、尾道市（尾道、吉和、向島西、細島）、竹原市（二窓、竹原）、呉市（三津口、三ノ瀬、阿賀、早瀬）、廿日市市（大野）および大竹市（大竹）が挙げられている。近年では竹原市や呉市の干潟における確認例はあるものの、個体群の衰退が懸念される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	干潟の減少や劣化および海域の基礎生産力の低下が影響している可能性がある。保全のためには潮間帯だけでなく潮下帯における生息状況の現状把握が求められる。
特記事項	—
産地情報	呉市（蒲刈）、竹原市、東広島市（安芸津）、江田島市（大柿）、海田町

西川輝昭 2012. ゴゴシマユムシ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 237. 東海大学出版会, 秦野.

森 喬以・田村松太郎・牧野謙二 1932. 広島県産主要餌虫類に関する報告書. 45 pp. 広島県水産試験場.

(斉藤英俊)

ヒトハリザトウムシ 準絶滅危惧(NT) NT-b, LP-①

Psathyropus tenuipes L. Koch, 1878

クモガタ綱ザトウムシ目 カワザトウムシ科

環 境 省: NT

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概 要	体長約 5 mm。腹部背面（第 2 背板）上に 1 棘がある。唯一の海浜性ザトウムシ。年一化卵越冬。成体は 6 月下旬から 7 月上旬に出現，晩秋までみられる。日中は砂浜をともなう海食崖の凹所などに密な集合をつくって休息する。夜間に活動し，波打ち際などで採餌する。体色や背の棘長，B 染色体の数などに顕著な地理変異がある。瀬戸内海の集団は体色が明るく背の棘も長い。B 染色体は広島県の集団は平均 1~2 個。河川感潮域のヨシ原の根元や河岸の間隙にも生息する。戦前は広島城の堀にも見られたが現在は確認できない。縮景園には健在。生息地が海と接していることが必要で，広島市元宇品のように周囲がコンクリート歩道で囲われたところでは絶滅。
生息・生育状況	瀬戸内海の島嶼部での調査は不十分であるが，海食崖と砂浜海岸がそろっている海岸には広く生息している可能性が高い。ただし，島の外周が舗装道路で囲われているようなところでは見られない。本土側の海岸のほとんどには舗装道路が走っており，本種の生息適地は消失している。河川感潮域にも見つかかり，広島市では太田川放水路や縮景園の庭園池（塩分あり）には現在でも生息が確認されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	自然海岸のこれ以上のコンクリート護岸化を避けることが重要。河川感潮域の護岸でも川岸に本種やカニ類が身を隠せる孔隙を残すような設計をお願いしたい。
特記事項	—
産地情報	広島市（中区，西区），竹原市，尾道市（向島），廿日市市（宮島），江田島市（能美，沖美）

Tsurusaki N. & Shimada T. 2004. Geographic and seasonal variations of the number of B-chromosomes and external morphology in *Psathyropus tenuipes* (Arachnida: Opiliones). *Cytogenetic and Genome Research*, 106: 365-375.

鶴崎展巨 2010. 長島田ノ浦海岸のヒトハリザトウムシ. 奇跡の海. 瀬戸内海・上関の生物多様性（日本生態学会上関要望書アフターケア委員会，編），p. 139-141. 南方新社，鹿児島.

（鶴崎展巨）

ゴホントゲザトウムシ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Himalphalangium spinulatum (Roewer, 1911)

クモガタ綱ザトウムシ目 マザトウムシ科

環 境 省: DD

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概 要	体長 1 cm ほどの大型・やや短脚のザトウムシ。体は黒褐色または黒色で，腹部背面正中線上に 5 個の短いトゲが縦列する。幼体越冬で成体は 5~6 月頃に出現。里地の人家周辺の竹林や雑木林に生息する。生息地は散発的である。やや明るい環境を好むようで竹林や雑木林の利用減少で遷移が進み林内が暗くなりすぎると個体数が減少したり集団が消滅することがある。生息地が里山であるため宅地開発などで消滅しやすい。
生息・生育状況	広島市，呉市，府中市で散発的に見つかっているのみだが，岡山県南部ではかなり多くの地点で見つかっており，広島県でも県南部を中心にもっと多くの生息地があるかもしれない。府中市の既知産地の 1 か所では個体数が減少しているようである。
存在を脅かす要因・保全の留意点	里山の竹林・雑木林などに生息するが，産地は不連続で散発的である。
特記事項	—
産地情報	広島市（西区，安佐南区），呉市（呉），府中市（府中），東広島市（河内）

鈴木正将 1986. 広島県のザトウムシ類. 比婆科学, 132: 7-45.

鶴崎展巨 2015. ザトウムシの生息環境. クモの科学最前線 -進化から環境まで- (宮下 直, 編), p. 176-196. 北隆館，東京.

（鶴崎展巨）

キシノウエトタゲモ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Latouchia typica (Kishida, 1913)
クモガタ綱クモ目 トタゲモ科

環境省: NT
広島県 2011: NT
広島県 2003: NT

概要	本州・四国・九州の低地に分布する。雌は 12～20 mm、雄は 10～15 mm である。頭胸部と歩脚は黒褐色、腹部は紫褐色である。歩脚が太い。また、触肢も太いため、脚が 10 本に見える。崖地などに横穴の管状住居を作り、入口に片開きの扉をつける。地面に縦穴を作ることもある。成体では、巣穴の直径が約 1.5 cm、深さが 5～10 cm くらいになる。成体の雌は一年中みられる。一方、成体の雄は 9～10 月頃に出現し、雌を求めて徘徊する。6 月頃に、冬虫夏草の 1 種であるクモタケ <i>Nomuraea atypicola</i> が発生することがあり、この時期には生息の確認が容易になる。
生息・生育状況	県内では沿岸部で生息が知られており、分布域は限定されている。市街地の公園緑地・城址・神社の境内などに生息し、広島市の比治山公園では個体数が多い。広島市内では古い家の庭などに生息することもある。一方、森林や山間部の寺社などでは確認されていない。公園緑地のような比較的規模の大きい生息地では、生息環境はある程度維持されると考えられるが、寺社や人家の庭などの小さな生息地の多くは生息基盤が脆弱である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	寺社や古い家の庭などの小規模の生息地では、生息地が改変されやすい。また、小規模の生息地では、周辺の開発にともなって乾燥化などの生息環境の質的な劣化が懸念される。一方、規模の大きな公園緑地のような生息地は、改変される可能性は小さい。しかし、市街地近郊では乾燥化によって生息適地が減少する可能性がある。
特記事項	—
産地情報	広島市（中区、東区、南区、西区、安佐南区、安佐北区、佐伯区）、呉市（川尻）、福山市（福山）、廿日市市（廿日市）、府中町

小川光昭・寺西玉実 1994. 広島市比治山のキシノウエトタゲモの現状 付 比治山の真正クモ類. 比和科学博物館研究報告, 32: 25-33.

畑守有紀・新海 明・上田俊徳 1997. クモタケ *Nomuraea atypicola* の全国分布調査結果 (1993～1996 年). *Kishidaia*, 72: 34-47.

(井原 庸)

アカオニグモ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Araneus pinguis (Karsch, 1879)
クモガタ綱クモ目 コガネグモ科

環境省: なし
広島県 2011: NT
広島県 2003: なし

概要	日本・韓国・中国に分布する。北海道では低地でもみられるが、本州では標高の高い草原や湿原に生息することが多い。雌は 15～22 mm で、成熟していないときの腹部は黄色で、成熟すると赤色になる。雄は 9～12 mm と小型で性差が著しく、体色はずっと黄色である。雌雄とも歩脚には褐色から黒色の環紋がある。広島県では成体は 9～11 月に出現する。草原の低木や草の間に 30～40 cm くらいの円網を張る。昼間にも網を張っている。
生息・生育状況	広島県では北部の標高の高い草原で記録がある。確認記録が少なく、生息地は限られ、個体数も少ないと考えられる。安芸太田町の深入山の草原は、継続して確認されている唯一の生息地である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	アカオニグモが生息するような標高の高い地域の半自然草原（二次的草地）は、山焼きや草刈りなどの人為的な管理によって維持されてきたものである。県内では管理放棄によって広い草原が放置され、生息適地が減少している可能性が高い。
特記事項	広島県の主要な生息地である深入山では、景観の維持や希少な植物の保全を目的とした山焼きや草刈りなどによる管理が行われている。それによって半自然草地が維持され、結果としてアカオニグモの生息環境がまもられている。
産地情報	広島市（西区）、庄原市（比和）、安芸太田町（戸河内）

小川光昭・寺西玉実 1993. 広島県の真正クモ類. 比和科学博物館研究報告, 3: 71-121

(井原 庸)

コガネグモ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

Argiope amoena L. Koch, 1878

クモガタ綱クモ目 コガネグモ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	日本では本州以南に分布し、国外では台湾・韓国・中国で見られる。雌は20~30 mm、雄は5~7 mmと性的二型が著しい。雌の腹部背面には黄色と黒褐色の縞模様がある。雄は小型で、褐色である。成体の出現時期は5~9月頃で、草や木の上に大きな円網を張る。野外でよく見かけるのはサイズの大きい雌のほうであり、雌の識別は容易である。コガタコガネグモやチュウガタコガネグモとは腹部背面の模様で区別できる。また、草原の低いところに円網を張るナガコガネグモは、腹部背面の色が黄色っぽく、褐色の細い横縞がある。広島県ではコガネグモをジョロウグモと呼ぶことがある。
生息・生育状況	全国的に個体数の減少傾向が知られている。広島県でも同様であるが、詳細な生息状況の推移は把握できていない。しかし、かつては普通に見られるクモであったが、近年は明らかに減少している。コガネグモの減少には、餌となる昆虫の生息状況が影響していると考えられる。大型の昆虫を捕食するコガネグモが減少しているのに対して、小型の餌を利用できるジョロウグモは市街地でも生息している。
存在を脅かす要因・保全の留意点	低山地や農地周辺の乾燥化や単調化などにもなっており、餌となる昆虫類が減少している可能性がある。
特記事項	減少傾向は明らかであるが、詳細な生息状況は把握できていない。野外でよく目立つ種であるため、情報収集が必要である。
産地情報	広島市、呉市、竹原市、三原市、尾道市(因島)、福山市、三次市、庄原市、大竹市、東広島市、廿日市市、安芸高田市、江田島市、府中町、海田町、熊野町、安芸太田町、世羅町、神石高原町

小川光昭・寺西玉実 1993. 広島県の真正クモ類. 比和科学博物館研究報告, 3: 71-121

(井原 庸)

ハクセンシオマネキ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Austruca lactea (De Haan, 1835)

軟甲綱十脚目 スナガニ科

環境省: VU

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	甲は台形で、甲幅は約21 mmまで。眼窩外歯は鋭く尖る。鉗脚は雄では左右いずれかが強大で、雌は左右同形で小さい。繁殖期(6~8月)にはほとんどの個体で体色が白色となる。わが国では三浦半島から九州沿岸、種子島まで、国外では朝鮮半島、中国大陸、ベトナム、台湾に分布する。湾や河口域の潮間帯上部の砂泥浜に巣穴を掘って生息する。干潮時には巣穴から出て、摂食、交尾、ウェイピングなどを行う。冬期は巣穴で冬眠するために地表に出現しない。
生息・生育状況	県内ではスナガニに比較して比較的広域に分布している。しかし、護岸工事による生息地の破壊によって個体群が消滅したことも報告されている。さらに、近年、プラスチック汚染によって生息環境は改善されていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	護岸工事による生息地の破壊、プラスチック汚染による生息環境の悪化に加えて、エストロゲン様内分泌攪乱物質が同属種の脱皮を阻害することが報告されており、化学物質も生存を脅かす要因となる可能性がある。
特記事項	各県が発行するレッドデータブックにおいて、広島県・兵庫県・岡山県・香川県・徳島県・長崎県・大分県・宮崎県・鹿児島県が準絶滅危惧種に、三重県・高知県・福岡県・熊本県が絶滅危惧Ⅱ類に、佐賀県が情報不足に選定している。
産地情報	広島市(西区, 佐伯区)、呉市(呉, 音戸, 倉橋, 下蒲刈, 蒲刈, 安浦)、竹原市、三原市(三原)、尾道市(尾道, 瀬戸田, 向島)、福山市(福山, 内海, 沼隈)、大竹市、東広島市(安芸津)、廿日市市(廿日市, 宮島)、江田島市(能美, 沖美, 大柿)、大崎上島町(東野, 木江)

和田恵次 2012. ハクセンシオマネキ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑(日本ペントス学会, 編), p. 215. 東海大学出版会, 秦野.

有吉英治 2016. 広島県のカニ類他図鑑. 86 pp. 自費出版.

(大塚 攻・有吉英治)

スナガニ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Ocypode stimpsoni Ortmann, 1897

軟甲綱十脚目 スナガニ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	大きさは甲幅 25 mm, 甲長 20 mm まで。甲はほぼ四角形で、前縁部には鋭い突起を有する。額は狭い。体色は砂色であるが、繁殖期には赤、黄色に変化する個体もある。鉗脚は左右非対称で、大きな方の前節内面には発音器（ヤスリ状の顆粒列がある）を有する。わが国では、室蘭、函館から九州沿岸、日本海側では男鹿半島以南の潮間帯上部から潮上帯におもに分布し、深さ 30 cm 程度の巣穴を掘って生息する。国外では朝鮮半島、中国大陸、台湾に分布する。基本的に夜行性であるが、昼間に巣穴から出てウェイピングなどを行うこともある。行動はきわめて俊敏である。
生息・生育状況	過去の広島県レッドデータブック（1995, 2003）において県内の個体群の縮小が指摘されており、全国的にも減少傾向が指摘されている。その後、生息地の改善も顕著でないことから減少傾向には歯止めはかかっていないと推定される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	潮間帯上部から潮上帯の砂浜に生息するため、開発による生息域の減少、劣化、さらに近年、プラスチックゴミの漂着などによって生存が脅かされている。
特記事項	成体の生息地に加えて、浮遊幼生が生存できる海域の水質保全も重要である。本県に加えて、愛媛県・兵庫県・大阪府・長崎県・熊本県・宮崎県・宮城県・山形県が準絶滅危惧種あるいは絶滅危惧II類に選定している。
産地情報	広島市（佐伯区）、呉市（蒲刈, 安浦）、竹原市、三原市（三原）、尾道市（尾道, 瀬戸田, 向島）、福山市（福山, 内海）、廿日市市（大野）、江田島市（江田島, 能美, 沖美, 大柿）、大崎上島町（東野）

西村三郎, 編 1995. 原色検索海岸動物図鑑 II. 663 pp. 保育社, 大阪.

有吉英治 2016. 広島県のカニ類他図鑑. 86 pp. 自費出版.

(大塚 攻・有吉英治)

ハマガニ 準絶滅危惧(NT) NT-a, NT-b

Chasmagnathus convexus (De Haan, 1883)

軟甲綱十脚目 モクズガニ科

環境省: NT

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	甲幅 50 mm のやや大型のカニ。甲は前後に強く湾曲し、中央でややくぼむ。前側縁は 2 個の切れ込みによって 3 葉に分かれる。体色は紫褐色から灰褐色で、短毛が目立つ。汽水域・河川（下流）に分布し、河口域や内湾の汽水上限の泥地（ヨシ原や川堤）に生息し、川そばの土手などに大きな穴を掘り穴居する。夜行性で雑食性であるが、おもにヨシなどの植物の葉を食べる。
生息・生育状況	汽水域の湿地に生息するカニであるが、河口付近の堤防や河床工事、あるいは潮止め堰の設置といった河川や川辺の改変、および河川流域での土地造成による淡水の流入量の変化などにより生息環境が悪化し、減少傾向にある。広島県内では生息が限定されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	河川工事などにより生息地が改変されたため、汽水上限の泥地が減少。
特記事項	夜行性であるため未確認の場所も多く、継続した生息状況調査が必要である。
産地情報	広島市（中区）、呉市（安浦）、尾道市（向島）、東広島市（安芸津）、江田島市（大柿）

稲葉明彦 1988. 増補改訂瀬戸内海の生物相 II. 475 pp. 広島大学理学部付属向島臨海実験所.

久家光雄 2002. 大柿町町制 45 周年記念誌「大柿町の花の生き物」. 216 pp. 大柿町.

(西原直久)

ハシボソテッポウエビ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Alpheus dolichodactylus Ortmann, 1890

軟甲綱十脚目 テッポウエビ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種の頭胸甲は1 cm程度で、額角の先端は眼蓋の前縁をわずかに超え、額角と眼蓋の間に浅い溝がある。大鉗の掌部は扁平で背鞍部がややくぼみ、指部は掌部と同長で外側縁は長毛が疎生する。小鉗は細く、指部は掌部のおおよそ3~5倍、可動指が円筒型。第3・4歩脚の指節は細長く、裏面が扁平でへら状。第3歩脚の前節には約5本の可動棘、座節に1本の可動棘がある。頭胸甲には中央部と後縁部に下部が前方に向かう灰褐色の斜横帯がある。各腹節の後半部は頭胸甲と同様の横帯模様で前下方に向かって先細る斜帯がある。尾節と各尾肢の縁が濃青色。日本ではかつて広く生息していたが、近年では瀬戸内海や九州に情報が限られる。
生息・生育状況	日本では東京・神奈川・和歌山・瀬戸内海・九州から記録されているが、東京湾や相模湾では干潟の埋め立てや人為的な開発の影響により確認できなくなった。広島県では軟泥が広がる河口干潟に生息しており、同所的にキセルハゼ・エドハゼ・タビラクチ・チワラスボなどのハゼ類が出現する。近年では豪雨災害の影響で土砂が河口域に流れ込み、干潟の性質が変性した生息地では、再確認ができなくなった場所もある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は干潟の泥底に巣穴を掘って生息するため、安定した底質が必要である。生息地は泥質干潟が広域に広がる場所であるが、いずれの生息地でも市街地に隣接しているため人為的な改変などの攪乱によって、生息環境の減少や劣化が懸念される。
特記事項	本種は <i>A. malabaricus</i> の亜種あるいは新参異名として位置づけられることもあるが、形態的特徴に差異が認められることから独立種とみなした。これら同胞種とは小鉗や歩脚の形状により識別可能である。なお、日本でも学名未決定の同胞種が琉球列島を中心に知られているが、斑紋や小鉗の形状が異なる。
産地情報	呉市(呉, 安浦), 竹原市, 三原市(三原), 尾道市(尾道, 因島, 向島), 福山市(福山)

吉郷英範 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類(甲殻類:エビ目). 比和科学博物館研究報告, 50: 221-273. 4 pls.

小山彰彦・乾 隆帝・菅野一輝・鬼倉徳雄 2018. 希少種ハシボソテッポウエビ *Alpheus dolichodactylus* の九州における分布記録. 日本生物地理学会会報, 72: 282-285.

(吉郷英範)

マングローブテッポウエビ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Alpheus sp.

軟甲綱十脚目 テッポウエビ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	本種の頭胸甲は1 cm程度で、眼蓋前縁がほとんど直線状で、額角の先端は第1触角柄部基節第1節の半分程度、額角と眼蓋の間には浅い溝がある。大鉗掌部は扁平で背縁と腹縁の鞍部が浅くくぼみ、指部の長さは掌部の2/3程度である。雄の小鉗は掌部が指部よりも短く、指部の不動指咬合面と可動指の側面に沿って毛冠列がある。雌の小鉗は指部が掌部よりも長く、可動指は円筒形で毛冠列はない。第3, 第4歩脚の指節は幅広いへら状となる。青褐色の細い横帯が頭胸甲の眼蓋下前縁, 中央および後縁, 各腹節後縁, 尾肢の中央にある。瀬戸内海・有明海・九州西岸・琉球列島のほか、朝鮮半島や黄海からも報告されている。
生息・生育状況	広島県では膝まで埋まるような軟泥質の河口干潟から確認されている。琉球列島でも河口水域に発達するマングローブ水路の軟泥部で確認されているが、種の扱いについては今後の精査を要する。タビラクチは本種の生息孔を一時的利用することが知られている。本種の生息孔付近ではエドハゼ・キセルハゼ・タビラクチなどが確認されており、巣穴を利用しているとも考えられるが、本種のみが単独で見られることもある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は砂泥底にやや浅い巣穴を掘って生息するため、安定した底質が必要である。いずれの生息確認地点でも泥質干潟が連続的に広がる地域で確認されており、人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。
特記事項	基本的な形態的特徴はオセアニアから知られる <i>A. richardsoni</i> によく類似するものの、分布域が大きく相違しており、環境省の扱いに準拠し、日本のマングローブテッポウエビを未同定種として扱うこととする。また、日本本土の個体群は分布状況を考慮すると、琉球列島の個体群との分類的な扱いについて再検討が望まれる。
産地情報	呉市(呉), 竹原市, 三原市(三原), 尾道市(尾道, 因島, 向島), 福山市(福山)

吉郷英範 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類(甲殻類:エビ目). 比和科学博物館研究報告, 50: 221-273.

Banner D. M. & Banner A. H. 1982. The alpheid shrimp of Australia, part III: the remaining alpheids, principally the genus *Alpheus*, and the family Ogyrididae. Records of the Australian Museum, 34: 1-357.

(吉郷英範)

シャミセンガイの1種 準絶滅危惧(NT) NT-b

Lingula sp.

舌殻綱舌殻目 シャミセンガイ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	ミドリシャミセンガイ <i>Lingula anatina</i> Lamarck, 1801, ドングリシャミセンガイ <i>L. rostrum</i> (Shaw, 1798), ウスバシャミゼンガイ <i>L. reevei</i> Davidson, 1880 に類似するが, 筋肉痕の配置が異なり, また, 遺伝的にもミドリシャミゼンガイ, ウスバシャミゼンガイと異なることが示唆されている。今回, 暫定的に <i>Lingula</i> sp. と同定し, 今後の分類学的検討が必要である。殻の長さは約 26 mm まで, 生体の殻の色は淡い黄緑色で, 前縁に向かって緑色が濃くなる。肉茎の伸長時の長さ 40 mm まで。瀬戸内海の潮間帯から潮下帯の泥砂底に埋没して生活する。
生息・生育状況	おもな生息場所である干潟の潮間帯から潮下帯が開発にさらされて減少している。浮遊幼生を持つと考えられ, 成体の生息する周辺海域の保全も必要となる。日本ではオオシャミセンガイ, ミドリシャミセンガイ以外に複数種が生息していると考えられ, 分類学的問題を解決すればさらに各種の固有性が判明する可能性もある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	おもな生息地である干潟が開発のために減少しており, さらに干潟での潮干狩りのために生息地が攪乱されてしまう。浮遊幼生の分布する海域の汚染も減少要因であろう。
特記事項	近縁のミドリシャミセンガイも全国で個体数・個体群の減少が報告されており, 本種も同様と考えられる。日本のレッドデータ検索システムによればミドリシャミセンガイに加えて3種の未同定種が掲載されている。ミドリシャミセンガイは岡山県・愛媛県・長崎県・熊本県で絶滅危惧 I 類あるいは II 類, 福岡県・佐賀県では準絶滅危惧種と選定されている。
産地情報	竹原市, 尾道市 (因島, 向島), 江田島市 (大柿)

広瀬雅人・大塚 攻・近藤裕介・平林丈嗣・富川 光・清水則雄 2012. 瀬戸内海中央部で発見された腕足類 2 種について. 広島大学総合博物館研究報告, 4: 43-48.

吉郷英範 2004. 広島県竹原市の河口干潟で確認されたウスバシャミセンガイ (腕足動物門). 比叢科学, 214: 1-5.

(大塚 攻・富川 光)

ヨツアナカシパン 準絶滅危惧(NT) NT-a

Peronella japonica Mortensen, 1948

ウニ綱タコノマクラ目 カシパン科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	相模湾から九州まで分布する。殻は直径 5 cm 程度, 輪郭は多角形に近い円形。棘は短く, 赤褐色。囲肛部は殻の後端付近に位置し, 囲肛板には刺を欠く。砂質底の浅海に生息する。
生息・生育状況	ほかのカシパン類と同所的な出現は確認されていない。尾道市の生息地では 2009 年以降, 個体数の減少が著しい。個体数の減少の要因は不明である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	開発などによる生息地である自然海岸の縮小や消失。
特記事項	個体数の減少要因の解明が急がれる。幼生がプランクトン生活を送るため, 広範囲にわたる沿岸環境の保全が重要である。
産地情報	呉市 (蒲刈, 安浦), 竹原市, 尾道市 (向島), 東広島市 (安芸津), 江田島市 (沖美, 大柿), 大崎上島町

西村三郎, 編著 1995. 原色検索日本海岸動物図鑑 II. 663 pp. 保育社, 大阪.

(富川 光)

スカシカシパン 準絶滅危惧(NT) NT-a

Astriclypeus manni Verrill, 1867

ウニ綱タコノマクラ目 スカシカシパン科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	相模湾以南の本州から九州まで分布する。大型のカシパンで殻は直径 14 cm, 高さ 1.5 cm 程度, 下面は平坦で上面はやや隆起し殻を貫通する 5 個の細長い穴が開く。棘は短く, 淡褐色。砂質底の浅海に生息する。
生息・生育状況	ハスノハカシパンと同所的な出現が確認されている。生息環境の悪化が懸念される。個体数の減少の要因は不明である。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	開発などによる生息地である自然海岸の縮小や消失。
特記事項	個体数の減少要因の解明が急がれる。幼生がプランクトン生活を送るため, 広範囲にわたる沿岸環境の保全が重要である。
産地情報	呉市 (倉橋), 江田島市 (沖美, 大柿)

西村三郎, 編著 1995. 原色検索日本海岸動物図鑑 II. 663 pp. 保育社, 大阪.

(富川 光)

ウチワイカリナマコ 準絶滅危惧(NT) NT-b

Oestergrenia dubia (Semper, 1867)

ナマコ綱無足目 イカリナマコ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	本州から九州にかけて記録があるが, 現在でも確実にみられる産地は少ない。体長 10 cm 程度, 体色は半透明の淡黄色で, 褐色の斑点がある。浅海の砂泥底に生息する。
生息・生育状況	生息地である砂泥質の干潟の減少や生息環境の悪化が懸念される。近年では 2006 年に竹原市から記録されている (鈴木 2012)。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	開発などによる生息地である浅瀬や干潟の縮小や消失。
特記事項	浮遊幼生期をもつため, 成体の生息場所である砂泥底とプランクトン幼生の生息海域の水質の保全が求められる。
産地情報	竹原市, 尾道市 (向島), 東広島市 (安芸津), 江田島市 (大柿)

鈴木孝男 2012. ウチワイカリナマコ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 239. 東海大学出版会, 秦野.

(富川 光)

ヒガシナメクジウオ(ナメクジウオ) 準絶滅危惧(NT) NT-b

Branchiostoma japonicum (Willey, 1897)

ナメクジウオ綱ナメクジウオ目 ナメクジウオ科

環境省: VU

広島県 2011: NT

広島県 2003: なし

概要	広島県内では三原市幸崎町有竜島の潮間帯から潮下帯の本種の生息地が国の天然記念物に指定されている。近年、生息地が悪化し、本海域にはほとんど生息が確認されていない。粗い砂が堆積した場所に潜って生活して植物プランクトンなどを摂食するが、一時的に水中へ泳ぎ出ることもある。大型個体の体長は約 70 mm。生殖腺は各側に 23~29 個、繁殖期には雌は黄色、雄は青白色を呈する。我が国では三陸沿岸から九州（太平洋側）、丹後半島以南（日本海側）、国外では中国大陸の沿岸域に分布する。
生息・生育状況	埋立、海砂採取、水質汚染、プラスチック汚染などの影響を受けて個体数・個体群の減少が継続していると考えられる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息地である干潟、潮下帯の開発、海砂採取などが個体数・個体群の衰退の主要な原因。また、浮遊幼生を持つため、周辺海域が汚染されていないことも保全上必要である。
特記事項	ヒガシナメクジウオあるいはナメクジウオとして、瀬戸内海に面する兵庫県・岡山県・広島県・愛媛県・福岡県・大分県が絶滅危惧Ⅰ類、Ⅱ類、あるいは準絶滅危惧に選定している。このほか、熊本県と佐賀県も絶滅危惧Ⅰ類に選定している。動物学的にたいへん貴重な動物で、個体数や個体群の動向が注目されている。
産地情報	呉市（倉橋）、竹原市、三原市（三原）、尾道市（尾道、向島）、福山市（福山）、廿日市市（佐伯）、江田島市（沖美）

Saito H. 2020. Population dynamics of lancelet *Branchiostoma japonicum* in the Seto Inland Sea, Japan. *Zoological Science*, 37: 331-337.

Saito H., Mimura K., Kawai K. & Imabayashi H. 2009. Temporal and spatial dynamics of a lower-intertidal lancelet population in the Seto Inland Sea, Japan. *Zoological Science*, 26: 550-556.

(大塚 攻・斉藤英俊)

ツバサゴカイ 情報不足(DD) DD-a, DD-b

Chaetopterus cautus Marenzeller, 1879

多毛綱ツバサゴカイ目 ツバサゴカイ科

環境省: EN

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	体長 25 cm に達する。砂泥中に埋没する半透明の固い膜でできた 直径 1 cm ほどの U 字型の棲管内に生息する。体は形態の異なる 3 部分からなる。体前部は 9~10 体節あり、頭部の前口葉はフリル状に伸びる。体中部は 5 体節あり、第 1 節に一对の大きな翼状の背側疣足がある。体後部は 10~60 体節あり、腹側疣足が長く伸びる。北海道から九州、極東ロシア、中国大陸の潮間帯から水深 20 m 以浅の潮下帯の砂泥底に分布する。
生息・生育状況	潮間帯から水深 20 m 以浅の潮下帯の砂泥底に生息する。過去の広島県レッドデータブック (2012) において、本種は要注意種として選定されているが、その後も生息状況に改善がみられていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種の存在を脅かす要因は水質汚濁、埋め立てが考えられる。水質汚濁は鰓呼吸や濾過食ができる良好な水質環境の維持に、埋め立ては生息地の消失・縮小、さらに棲管が形成できる安定した厚い堆積層のある干潟環境の維持に、留意する必要がある。
特記事項	—
産地情報	呉市（倉橋）、竹原市、三原市（三原）、尾道市、江田島市（沖美、大柿）

西栄二郎 2002. 干潟の普通種ツバサゴカイに忍び寄る危機. *タクサ*, 12: 8-17.

山西良平 2012. ツバサゴカイ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 224. 東海大学出版会, 秦野.

(斉藤英俊・有吉英治)

コマイクガビル 情報不足(DD) DD-a, DD-b

Orobdella naraharaetmagarum Nakano, 2016

ヒル綱ヒル目 クガビル科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	クガビル属は湿潤な林床などに生息する陸性ヒル類で、ミミズなど土壌生物をおもに食べている。本種は全長 6 cm 未満で同属他種よりも小型で、背面が青味を帯びた灰褐色で腹面が灰白色、両生殖孔は体輪内に開孔し、その間の体輪が 4 本であること、中国山地に分布していることで本種に同定される。中国地方に生息するヨツワクガビル類似種（体色が緑褐色で全長 20 cm に達する）とはほぼ同所的に確認されているが、色彩的形質のほかに体長が 5 cm 未満で貯精嚢が第 15~20 体節の間にあることでも識別される。本種の分布は中国山地内に限定されているが、過去における人為的攪乱によって分布域が限定されている可能性がある。
生息・生育状況	落ち葉が堆積した倒木の下などのやや湿った環境で見られるが、降雨後などでは活発になり、林道などの路上にも出現する。これまでのところ生息情報は中国山地（既知産地は広島県域のほか鳥取県琴浦町）に限られている。中国山地ではかつてたたら製鉄が盛んに行われていたが、既知生息地はこのような人為的攪乱が少ない地域と推定される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	森林開発による生息域の分断や生息環境の乾燥化が考えられる。
特記事項	本種は 2016 年に廿日市市吉和の冠山を模式産地として記載された種であるため生息情報が乏しいものの、本属の種に関する情報自体がこれまでない。本種の生息域は、人為的攪乱の大きい中国山地の中でもその影響が少ないと考えられる地域内に点在している。同山地には同属のヨツワクガビル類似種（未記載種）も生息するが、この種よりもやや乾燥した環境下でも確認される。
産地情報	庄原市（高野）、廿日市市（吉和）、北広島町（芸北）

Nakano, T. 2016. A new quadrannulate species of *Orobdella* (Hirudinida, Arhynchobdellida, Orobdellidae) from western Honshu, Japan. *ZooKeys*, 553: 33–51.

吉郷英範 2018. 庄原市立比和自然科学博物館収蔵のヒル綱（環形動物門）の標本とその生態記録 II. *比婆科学*, 264: 9-20, 1 pl.

(吉郷英範)

タゴビル 情報不足(DD) DD-a, DD-b

Torix tagoi (Oka, 1925)

ヒル綱ヒル目 ヒラタビル科

環境省: DD

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	全長 11~14 mm 程度。眼は 2 対で後吸盤は体幅よりも明瞭に狭い。背面は平滑で細い暗緑褐色の縦線が密にあるため緑褐色にみえ、両眼間からやや後方にかけて淡色縦帯が正中線上にあり、体の縁辺や腹面は淡色である。胃側盲嚢先端の形状はやや円い。溪流性両生類の体表に寄生し、吸血後に脱落する。日本では中部地方や中国地方から生息情報が得られているが、中国などユーラシア大陸における記録については今後、分類精査が必要と考えられる。
生息・生育状況	県下では西中国山地においてタゴガエルの体表や産卵巣内、ハコネサンショウウオの体表に寄生した個体が確認されている。これらはいずれも標高 1000 m 以上の地点であるが、これまで類似種との混同があったものと予測され、今後の知見の増加にともなって生息情報の増加が考えられる。生息確認地域はいずれも人為的攪乱の少ない地域であるが、宿主の生息状況に影響を受けている可能性が高い。
存在を脅かす要因・保全の留意点	森林開発による生息域の分断、生息環境の乾燥化にともなう分布域の縮小が考えられる。同じ理由により影響を受ける宿主となる溪流性両生類の減少も影響を受けるため、宿主となる両生類自体の生息域縮小にともなう生息地の減少が懸念される。
特記事項	廿日市市吉和（標高 600 m くらい）では本種によく類似した同属の小型ヒル類がヤマアカガエルから確認されているものの、種の特定はできていない。同属のツクバビル <i>T. tukubana</i> は背面に小突起が列生して眼が 1 対であり、吉和の冠山から記録されているものの今回の選定に間に合わなかった。スクナビル <i>T. orientalis</i> は後吸盤が体幅よりも幅広く、中国地方では岡山県から確認されている。
産地情報	廿日市市（吉和）、北広島町（芸北）

佐々木彰史 2019. 両生類に寄生する *Torix* 属 3 種の記録. *両生類誌*, 32: 5-7.

吉郷英範 2018. 庄原市立比和自然科学博物館収蔵のヒル綱（環形動物門）の標本とその生態記録 II. *比婆科学*, 264: 9-20, 1 pl.

(吉郷英範)

チャイロビル 情報不足(DD) DD-a

Whitmania acranulata (Whitman, 1886)

ヒル綱ヒル目 チスイビル科

環境省: なし

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	全長 5 cm 程度。背中線上に太い淡黄色の縦帯、その両側に 2 対の細い縦列線があり、片側 2 本の側線間には等間隔に淡い黄褐色の楕円形紋が縦列する。背中線上の太い縦帯の両横には不明瞭な暗色斑紋が対をなして配列するが、やや不明瞭である。腹には黒色斑紋がないものの、側縁に不明瞭な暗色縦帯がある。吻部は極端に先細りしない。本属の種はおもに止水域などで淡水巻貝類を捕食しており、本種も同様と考えられる。本種に関する生息情報は全国的にほとんどないが、同属他種と混同されている可能性がある。
生息・生育状況	本種が記載された戦前では日本各地に広く生息していたと考えられるが、近年では生息情報が乏しい。同属他種と混同されている可能性があるものの、少なくとも県下ではよく類似したセスジビル <i>W. edentula</i> に比較して確認数がきわめて少ない。県下で確認された個体は水田周辺の水路内から見出されたが、周辺の水田から流出したか上流から流されてきたかは不明である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	水田などの湿地環境に依存して生息していると推定され、圃場整備による乾田化・農薬等の化学物質が本種の生息に影響を与えている可能性がある。生息地の縮小や分断にともなう減少が懸念される。
特記事項	生殖孔の位置や背面の様子はゴホンセスジビル <i>W. leavis</i> に類似しているが、ほかの日本産同属種には腹面に不規則な黒色斑紋が散在する。また、ウマビル <i>W. pigra</i> やセスジビルの雌性生殖孔は体輪と体輪の間に位置しているが、調査標本では生殖孔が体輪部の後端に位置していた。
産地情報	東広島市 (西条)

Whitman, C.O. 1886. The leeches of Japan. Part 1. The ten-eyed leeches, or the Hirudinidae. The Quarterly Journal of Microscopical Science, 26: 317-416. pl. 17-21.

吉郷英範 2018. 庄原市立比和自然科学博物館収蔵のヒル綱 (環形動物門) の標本とその生態記録 II. 比婆科学, 264: 9-20, 1 pl.

(吉郷英範)

スギモトブラシザトウムシ 情報不足(DD) DD-c

Sabacon makinoi sugimotoi Suzuki & Tsurusaki, 1983

クモガタ綱ザトウムシ目 ブラシザトウムシ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	北海道と本州に生息するマキノブラシザトウムシ <i>Sabacon makinoi</i> の本州亜種である。体長 2~3 mm, スギモトブラシザトウムシは富山県以北にほぼ連続に分布する。それ以南では近縁種のコブラシザトウムシ <i>S. pygmaeum</i> に分布が交替するが、中国地方の船通山・道後山・比婆山系と徳島県の高標高地にはスギモトブラシザトウムシの隔離分布が見られる。山頂や稜線付近のササ原などの地表リター中に生息する。幼体はほぼ周辺見られるが、成体が見られるのは春から夏まで。
生息・生育状況	船通山や道後山の山頂付近のササ原の地上などで確認されているが、近年の状況は不明。
存在を脅かす要因・保全の留意点	過度の踏みつけやシカ食害によるササ原の消失には注意が必要である。
特記事項	—
産地情報	庄原市 (西城, 口和, 高野)

Suzuki S. & Tsurusaki N. 1983. Opilionid fauna of Hokkaido and its adjacent areas. J. Fac. Sci. Hokkaido Univ. VI, Zool., Vol. 23: 195-243.

鈴木正将 1986. 広島県のザトウムシ類. 比婆科学, 132: 7-45.

(鶴崎展巨)

ダイセンニセタテヅメザトウムシ 情報不足(DD) DD-c

Metanippononychus daisenensis Suzuki, 1975

クモガタ綱ザトウムシ目 ニセタテヅメザトウムシ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	体長 1.5~2 mm ほどの小型・短脚のザトウムシ。体は橙色。鳥取県・岡山県県境沿い山地から広島県東部の山地の固有種。広島県の集団は鳥取以東の集団とは生殖器形態がやや異なる。比婆山系には近縁のニホンニセタテヅメザトウムシが生息するが、広島県の本種は交尾器形態に関して移行的である。通常ブナ帯以上の標高の山地にしか出現しないが、広島県東部では比較的標高の低い地域にも出現している。森林リター中や石下、カンスゲの根元などに生息。成体は周年採集される。
生息・生育状況	広島県で本種がみられる地域は東部の岡山県境沿いの山地の森林林床に生息するが最近の状況は未確認。
存在を脅かす要因・保全の留意点	広島県で本種がみられる地域は東部の岡山県境沿いの山地の森林林床であるが、この地域はもともと雨量が少ない。近年の猛暑小雨の夏には林床が極度に乾燥することがあり、生息地の存続状況について再調査が必要と思われる。
特記事項	—
産地情報	福山市 (福山), 庄原市 (西城, 東城), 神石高原町 (油木)

Suzuki S. 1975. The harvestmen of family Triaenonychidae in Japan and Korea (Travunioidea, Opiliones, Arachnida). J. Sci. Hiroshima Univ. (B-1), 26: 65-101.

Derkarabetian S., Starret J., Tsurusaki N., Ubick D., Castillo S. & Hedin M. 2018. A stable phylogenomic classification of Travunioidea (Arachnida, Opiliones, Laniatores) based on sequence capture of ultraconserved elements, ZooKeys, 760: 1-36.

(鶴崎展巨)

イソタナグモ 情報不足(DD) DD-b

Paratheuma shirahamaensis (Oi, 1960)

クモガタ綱クモ目 ハグモ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	北海道から南西諸島まで分布し、韓国からも知られている。体長は雌雄とも 4~7 mm くらいとやや小型である。頭胸部は黄褐色から赤みを帯びた褐色で、腹部は灰褐色から黒褐色、歩脚は黄褐色で環紋がない。海岸の潮上帯の礫の間、転石や倒木の下、岩の隙間などに、小さい棚網のついた住居を作る。満潮時に海面下になるような場所にも営巣することがある。成体は周年出現する。近年、近縁な外来種であるシマイソタナグモ <i>P. insulana</i> の生息が確認されている。広島市の太田川放水路ではイソタナグモとシマイソタナグモが同所的に生息するが、両種の生息環境の違いはみられない。
生息・生育状況	本土側の海岸は埋め立てや護岸の整備によって、自然海岸や潮上帯のある海岸、干潟・砂浜の後背地が消失し、イソタナグモの生息環境が減少した。一方、島嶼部では生息地は比較的安定しているが、外周道路などによって潮上帯のある海岸が減少しているところも多い。また、広島県・山口県・愛媛県など、瀬戸内海では近縁な外来種であるシマイソタナグモの生息が確認されている。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生息環境が競合する近縁な外来種であるシマイソタナグモが確認されている。現状では絶滅のおそれは小さいと考えられるが、今後の両種の動向に注意する必要がある。最近では、新たな海岸の開発による生息環境の消失は減少していると考えられる。
特記事項	近縁種のシマイソタナグモの本来の生息地は、アメリカ合衆国のフロリダ半島・キューバ・ハイチなどである。
産地情報	広島市, 呉市, 尾道市, 廿日市市

小野展嗣 2006. 相模灘沿岸地域の海浜性クモ類. 国立科学博物館専報, 42: 255-274.

(井原 庸)

トゲカイエビ 情報不足(DD) DD-b, DD-d

Leptestheria kawachiensis Uéno, 1927

鰓脚綱双殻目 トゲカイエビ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	中部地方以西に分布する。長らく日本固有種とされていたが、中国東部からも分布が確認された。甲殻表面に多数の成長線を有する。殻弧は明瞭に発達、複眼は左右分離して近接する。雄の第1胸肢および第2胸肢は把握器に変形する。雌雄ともに吻端に1頂棘を備えることで近縁の他種から区別される。
生息・生育状況	水田のみに生息するが、生息地においても出現する水田は限られている。県内の分布情報は限られており、生息状況の詳細は不明である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	宅地開発や土地利用の変化などによる生息地である水田の減少や消失。
特記事項	広島県にはトゲカイエビ以外にも複数種のカイエビ類が分布する可能性があるが、出現状況はほとんどわかっていない。県内におけるカイエビ類の分布調査が必要である。
産地情報	三原市(三原)、福山市(福山)、庄原市(庄原)、東広島市(西条)、江田島市(大柿)

長縄秀俊 2001. 現世の「大型鰓脚類」の分類. 陸水学雑誌, 62: 75-86.

長縄秀俊・タチヤナ・オルギリヤノワ 2000. 東アジアの大型鰓脚甲殻類: 1. カイエビ目. 海洋と生物, 128: 272-278.

(富川 光)

ハサミシャコエビ 情報不足(DD) DD-b

Laomedia astacina de Haan, 1841

軟甲綱十脚目 ハサミシャコエビ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	全長 70 mm 程度まで。全体的に軟毛で覆われる。第一胸脚は大きくて左右相称で、先がハサミ状、とくに背面では剛毛が密生する。体は黄土色をしているが、軟毛の間に泥がこびりついて泥褐色に見える。河口干潟や内湾の潮間帯の砂泥底に複雑な巣穴を掘って生息するが、小型個体は礫質海岸の潮溜りで見られることもある。生息孔周辺に巣穴内から排出した泥を押し出してカルデラ状の塚を形成する。巣穴の深さは 80 cm にもおよぶこともあるが、転石帯などで見られる個体は地表から 10 cm 未満から得られることが多い。わが国では関東以南、国外では 韓国・中国・台湾・ベトナムに分布する。
生息・生育状況	潮間帯の中でも生息環境として砂泥地を好んでおり、尾道市や福山市にある規模の大きな干潟では比較的多い。県下における記録産地の多くは小規模な砂泥地にある転石下などであって、同時に複数個体が得られることも少ない。過去に竹原市と江田島市(大柿)における生息情報もあるが、近年における生息情報が収集されていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は砂泥底に巣穴を深く掘って生息するため、安定した底質が必要である。小規模な環境では転石帯の存在が環境維持に寄与することもあり、人為的な改変などの攪乱により、生息環境の減少や劣化が懸念される。
特記事項	本種は浮遊幼生期間を経て生息環境に定着するため、着底後の生息地が必ずしも繁殖地とは限らない。繁殖地となっている可能性がある広島県内の生息地として、日之浦干潟・松永湾域・芦田川河口・ハチの干潟などが挙げられる。
産地情報	広島市(西区, 佐伯区)、呉市(呉, 安浦)、竹原市、三原市(三原, 本郷)、尾道市(尾道, 向島)、福山市(福山)、大崎上島町(大崎)

三宅貞祥 1982. 原色日本大型甲殻類図鑑 I. 262 pp. 保育社, 大坂.

西村三郎 1995. 原色検索日本海岸動物図鑑 II. 664 pp. 保育社, 大坂.

(大塚 攻・吉郷英範)

ベンケイガニ 情報不足(DD) DD-b, DD-d

Sesarmops intermedius (De Haan, 1835)

軟甲綱十脚目 ベンケイガニ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	大きさは甲幅 32 mm, 甲長 28 mm 程度。甲は四角形で, 前側縁には 1 個の切れ込みがある。額は広く, 中央で窪む。額の後方の稜線は顕著で 4 個に区分される。体色は甲全体が赤橙色の場合と前半だけあるいは前縁だけが赤橙色の場合など変化に富む。鉗脚には, 掌部内面に 1 個の顆粒列をもち, 同外面には多数の顆粒を散布し中央付近にやや大型の平たい顆粒の集合体がある。近似種のアカテガニは前側縁に切れ込みがないこと, 掌部内面に顆粒列をもたないこと, 鉗脚の外面は滑らかであることなどで識別できる。わが国では房総半島・男鹿半島以南に分布し, 国外ではインド・西太平洋沿岸に分布する。
生息・生育状況	本種は河口のヨシ原・土手・石垣・林・草原など水辺の暗く湿った場所を好んで生息し, 昼は巣穴や物陰に隠れ, 夜に活動する。繁殖期は夏で, ふ化間近の卵を持った雌は大潮の夜の満潮時, 川や海に移動して幼生を放出する。幼生は海で幼ガニ近くまで成長し戻ってくる。近似種のアカテガニは約 1 か月後河口に戻るとの知見がある。県内での生息は近年記録がないが, 2000 年以前の文献では向島と宮島での確認記録がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	成体は河口潮上帯のヨシ原や石垣・土手などを棲家としており, 河口域の埋め立て・土地の改変・人工護岸化などが存在を脅かす要因となる。幼生は海域で成長し戻ってくることから, 周辺海域の水質環境が存在を脅かす要因となる。成体に対しては生息地の消失・縮小, 河川ないし小水路の水質汚濁, 産卵移動経路の遮断などに, 幼生に対しては周辺海域の富栄養化に, 留意する必要がある。
特記事項	各県が発行するレッドデータブックにおいて, 愛媛県・千葉県が絶滅危惧 I 類に, 兵庫県・宮崎県が絶滅危惧 II 類に, 徳島県・高知県・島根県・福岡県・熊本県が準絶滅危惧種に選定している。
産地情報	尾道市 (向島), 廿日市市 (宮島)

逸見泰久 2012. ベンケイガニ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 199. 東海大学出版会, 秦野.

山下欣二 1990. 瀬戸内海とそこにすむカニ類の生態. 遺伝, 44 (2): 70-71.

(有吉英治)

ヒメヤマトオサガニ 情報不足(DD) DD-b, DD-d

Macrophthalmus banzai Wada & Sakai, 1989

軟甲綱十脚目 オサガニ科

環境省: NT

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	大きさは甲幅 23 mm, 甲長 15 mm 程度。甲は横に長い長方形で, 額は狭い。前側縁には 3 歯あり, 眼窩外歯の後ろに 1 個の大きな切れ目がある。鉗脚は左右同大であるが, 雄では大きく, 雌では小さい。雄の第 3 歩脚の前節と腕節の上縁には毛が密生する。沖縄以外では夏に繁殖を行い, 雄は鉗脚を振り上げ, バンザイをするような求愛行動を行う。近似種のアサガニとは雄の第 3 歩脚の前節と腕節に毛をもたないこと, 求愛行動が鉗脚を曲げたまま上下すること, などが識別点になっている。国内では紀伊半島以南に分布し, 国外では朝鮮半島西岸・中国大陸山東半島・中国大陸南岸・台湾に分布する。
生息・生育状況	成体は泥浜干潟のおもに低い所に巣穴を掘り, 生息する。幼体については, 近似種のアサガニの後期幼生メガロパが 8 月上旬から 9 月にかけて成体の巣穴や周辺の泥地上や河口付近に浮遊するゴミ・草木上で確認できるとの報告があり, 成体の生息地周辺に生息していると推察される。県内での生息状況は, 近似種のアサガニに比べると一部地域に局限される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	本種は干潮時に干出する泥浜干潟を生息地とする。このような場所は水深が浅く, 埋め立てや港湾の建設・浚渫が存在を脅かす要因となる。埋め立ては生息地の消失・縮小, 港湾の建設・浚渫は土砂の堆積・流出, 底質環境の還元化, に留意する必要がある。
特記事項	各府県が発行するレッドデータブックにおいて, 三重県が絶滅危惧 I 類に, 兵庫県・熊本県が絶滅危惧 II 類に, 大阪府・愛媛県・福岡県・宮崎県・長崎県が準絶滅危惧種に, 大分県が情報不足に選定している。
産地情報	呉市 (呉, 倉橋, 蒲刈, 安浦), 竹原市, 尾道市 (尾道), 福山市 (福山)

逸見泰久 2012. ヒメヤマトオサガニ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 212. 東海大学出版会, 秦野.

村岡健作 1980. カニ類の幼生(7) アリアケモドキ・ヤマトオサガニ. 海洋と生物, 2 (3): 204-205.

(有吉英治)

オオヨコナガピンノ 情報不足(DD) DD-b, DD-d

Tritodynamia rathbunae Shen, 1932

軟甲綱十脚目 オサガニ科

環境省: EN

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	大きさは甲幅 20 mm, 甲長 11 mm 程度。甲は横に大きく長い楕円形で、前後に湾曲しているため筒状となる。側縁には切れ込みがない。額は狭く中央の浅い溝で分かれる。体色は灰紫褐色の地に褐色の複雑な模様を散りばめる。鉗脚や歩脚には多くの部位に毛列をもつ。歩脚は第 2 脚がもっとも大きく、次いで第 3 脚, 第 1 脚, 第 4 脚はきわめて小さい。本種は潮間帯下部から浅海の砂泥地に生息するツバサゴカイの棲管内やミサキギボシムシの巣穴内に共生する。わが国では東京湾・相模湾・三河湾・伊勢湾・瀬戸内海・九州の沿岸に分布し、国外では韓国の黄海沿岸・中国大陸北部に分布する。
生息・生育状況	成体はツバサゴカイの棲管内で共生生活をする。このため宿主の健全な生息状況が必要不可欠である。過去の広島県レッドデータブック (2012) において、本種の宿主であるツバサゴカイが要注意種として選定されているが、その後も宿主の生息状況に改善がみられていない。したがって、現状では本種の生息状況も同じ傾向にあると推察される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	宿主ツバサゴカイの存在を脅かす要因は水質汚濁、埋め立てが考えられる。水質汚濁は鰓呼吸や濾過食ができる良好な水質環境の維持に、埋め立ては生息地の消失・縮小、さらに棲管が形成できる安定した厚い堆積層のある干潟環境の維持に、留意する必要がある。
特記事項	各県が発行するレッドデータブックにおいて、福岡県・熊本県が絶滅危惧 I 類に、岡山県が準絶滅危惧種に選定している。
産地情報	呉市 (音戸), 竹原市, 三原市 (三原), 江田島市 (大柿)

渡部哲也 2012. オオヨコナガピンノ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 214. 東海大学出版会, 秦野.

酒井 恒 1975. オオヨコナガピンノ. 新日本動物図鑑 中 (岡田 要・内田清之助・内田 亨, 監修), p. 710. 北隆館, 東京.

(有吉英治)

ウチノミカニダマシ 情報不足(DD) DD-b, DD-d

Polyonyx utinomii Miyake, 1943

軟甲綱十脚目 カニダマシ科

環境省: EN

広島県 2011: なし

広島県 2003: なし

概要	大きさは甲幅 4 mm, 甲長 3 mm 程度。甲は横長の楕円形。甲は縦方向に湾曲し、額は中央がわずかに三角形に突出する。側縁には第 2 触角基部付近に小さな窪みがある。体色は灰青色の地に淡褐色の斑紋があり、体後部に 1 対の丸い斑紋が目立つ。甲面の前縁に短毛が列をなす横条が多数ある。第 1 脚は左右不同、掌部の外縁には長毛が密生する。近似種のヤドリカニダマシは、甲が丸みを帯びた正方形に近いこと、第 1 脚の腕節前縁が前方に膨れ、同指部内縁の基部に各 1 小歯をもつこと、などが識別点となる。わが国では、伊豆半島・紀伊半島・瀬戸内海・有明海に分布し、国外ではモルディブ共和国に分布する。
生息・生育状況	潮間帯から水深 20 m 以浅の潮下帯の砂泥底に生息するツバサゴカイの棲管内に共生する。共生率は 10 % 以下とする報告がある。このため宿主の健全な生息状況が必要不可欠である。過去の広島県レッドデータブック (2012) において、宿主であるツバサゴカイが要注意種として選定されているが、その後も宿主の生息状況に改善がみられていない。したがって、現状では本種の生息状況も同じ傾向にあると推察される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	宿主ツバサゴカイの存在を脅かす要因は水質汚濁、埋め立てが考えられる。水質汚濁は鰓呼吸や濾過食ができる良好な水質環境の維持に、埋め立ては生息地の消失・縮小、さらに棲管が形成できる安定した厚い堆積層のある干潟環境の維持に、留意する必要がある。
特記事項	各県が発行するレッドデータブックにおいて、福岡県・熊本県・沖縄県・高知県が絶滅危惧 I 類に選定している。
産地情報	三原市 (三原), 江田島市 (沖美)

渡部哲也 2012. ウチノミカニダマシ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 (日本ベントス学会, 編), p. 188. 東海大学出版会, 秦野.

奥迫 優・岡 浩平 2019. 瀬戸内海沿岸の干潟におけるベントスの分布状況. 第 27 回瀬戸内海研究フォーラム in 広島 瀬戸内海における持続可能な開発目標 (SDG s) に向けた里水と里海の連携. ポスター発表 36. 特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議.

(有吉英治)

ミナミヌマエビ 地域個体群(LP) LP-①

Neocaridina denticulata denticulata (De Haan, 1841)

軟甲綱十脚目 ヌマエビ科

環境省: なし

広島県 2011: AN

広島県 2003: なし

概要	本州中部から鹿児島県まで分布する。体長は10~30mm。額角は長く、第1触角柄部を超える。前側角部に棘を備える。雄第1腹肢の内肢は西洋ナシ型。浮遊幼生期を欠くため移動分散能力が低く、水系ごとに遺伝的な分化が生じやすい。近年、同属の近縁種・亜種が国外から移入されたことにより、本種との競合や交雑による遺伝的攪乱が懸念されている。
生息・生育状況	生息地における個体数が多いが、外来種の侵入状況は不明であり、遺伝子汚染などの実態は明らかでない。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	外来の近縁種・亜種との競合や交雑のおそれがある。
特記事項	釣り餌や観賞目的で中国や韓国から近縁種・亜種の多数個体が輸入され、それらの一部が野外に流出している可能性がきわめて高い。形態形質のみに基づく外来種との判別は難しい。また、河川ごとに遺伝的に分化している可能性が高いため、異なる産地の個体を放流することは慎みたい。
産地情報	広島市(安佐南区, 安佐北区, 安芸区), 呉市(呉, 蒲刈), 竹原市, 尾道市(尾道), 福山市(福山, 神辺), 三次市(三次), 大竹市, 東広島市(西条, 高屋), 廿日市市(廿日市), 安芸高田市(甲田), 江田島市(大柿), 大崎上島町

小川泰樹・若下藤雄・角田俊平・具島健二・橋本博明 1986. 広島県東部, 芦田川水系のエビ類とその分布. 広島大学生物生産学部紀, 25: 9-40.

鈴木廣志・佐藤正典 1994. かがしま自然ガイド. 淡水産のエビとカニ. 141 pp. 西日本新聞社, 福岡.

(富川 光)